神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

トゥイ族：ベルトルト・ブレヒトの『トゥーランドット又は潔白証明者会議』と『トゥイ・ロマン』について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 1975-06-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小川, 正巳, Ogawa,, M.
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2176

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

トゥイ族

ベルトルト・ブレヒトの『トゥーランドット又は潔白証明者会議』と『トゥイ・ロマン』について

小川正巳

ブレヒト(1898—1956)の劇作『トゥーランドット』と未完の長篇小説『トゥイ・ロマン』はフランクフルト・アム・マインのズーアカンプ社と東ベルリンのアウフバウ社から出版されていた「劇作集」14巻（1957—67）においては一巻（第14巻）にまとめておさめられている。当論文を書くにさいして私が使用したエリザベート・ハウプトマン監修になる同じくズーアカンプ社の20巻本（1967）においては，前者は劇作の第5巻（全集の第5巻）後者は散文の第2巻（全集の第12巻）におさめられているが，その『トゥーランドット』の始めに劇作編者エリザベート・ハウプトマン（協力者ローゼマリー・ヒル）は次のように書いている,「劇作『トゥーランドット又は潔白証明者会議』は，大部分まだ計画とスケッチのままの膨大な文学的集合体の一つである。その一部をなすものとして小説『トゥイ族の没落』,一巻の物語集『トゥイ物語』,小劇作シリーズ『トゥイ茶番劇』及び小論文集『おべんちゃら術及びその他の術』がある。著者が数十年にわたって従事していたこれらの諸作品は知性のあやまった使用を取りあつかっている。[(1)]」『トゥイ・ロマン』の後記に編者クラウス・フェルカーはこう書いている，「『トゥーランドット』劇をブレヒトはすでに1931年頃に計画していた。デンマーク亡命中かれはより大きな作品(『三文オペラ小説』,劇作『まる頭ととんがり頭』の新稿）の完成以前にも新たに『トゥーランドット』素材に取り組んだ。この仕事をかれ

(1) Bertolt Brecht Gesammelte Werke. Suhrkamp Verlag 1967. Bd. 5, S.2194

は間もなく断念したが，20年後になってやっと再び取りあげた。その代りにかれはトゥイ族に関するロマンを始めた，この仕事はしばしば他の仕事によって中断されはしたが，40年代のなかば頃までかれは没頭していた。…劇作『トゥーランドット又は潔白証明者会議』及び『トゥイ・ロマン』以外にブレヒトは大部分まだ計画とスケッチのままの膨大な文学的集合体に次のようなものを考慮していた，すなわち一巻の物語集『トゥイ物語』，小劇作シリーズ『トゥイ茶番劇』及び『おべんちゃら術及びその他の術』という小論文集。[2]

つまり劇作『トゥーランドット』，『トゥイ・ロマン』及び『トゥイ物語』，『トゥイ茶番劇』，小論文集『おべんちゃら術及びその他の術』はブレヒトが考えていた一つの「膨大な文学的集合体[3]」をなすものであって，その集合体の対象は「トゥイ族」である。「トゥイ」（Tui）とはTellekt-Uell-Inの頭文字，すなわちインテリゲンチャ（Intellektuell）のことで，ブレヒト自身の定義によれば「トゥイとは市場と商品のこの時代のインテリゲンチャである。知性の賃貸し屋[4]」ということになる。もっとくわしく言うならば，『トゥイ・ロマン』の後記において引用されているエリザベート・ハウプトマンの言葉によれば，「ヴァイマール共和国――ここ（トゥイ・ロマンでは）ヒーマ共和国」と「その共和国の堕落と没落にさいして演じたトゥイ族の役割[5]」ということになる。同じ後記は1934年のブレヒトの次のようなノートを引いている，「トゥイ族の黄金時代は自由主義的共和国であるが，トゥイズムはその頂点を第三帝国にきわめる。イデアリズムがその最底段階に達して，その巨大なる勝利をたたえる。」創作過程から見ると，『トゥーランドット』は1930年に女優カローラ・ネーエルを主役に想定して書きはじめられ，亡命中たび

(2) B. Brecht Gesammelte Werke. Bd.12. 4 * Anmerkungen

(3) 『トゥイ物語』14篇と小論文集のうちの二篇『同衾術について』，『おべんちゃら術』は全集第12巻目の『トゥイ・ロマン』において見ることができるが，『トゥイ茶番劇』は見いだせない。

(4) Bd.12. S.611

(5) Bd.12. 4 * Anm.

たび取りあげられながら，50年代の始めにやっとベルリンで「暫定的」に完成されたこと，一方『トゥイ・ロマン』はデンマーク亡命中に始められたが，以後クラウス・フェルカーの『ブレヒト年代記』によれば，これに関して次のような諸事項に出あう。1935年6月パリで行われたファシズムに対する第一回文化擁護国際作家会議に参加した「ヴァルター・ベンヤミンにとってブレヒトに会えたことが『この業事での最もうれしいこと——多分唯一のうれしいこと』であった。ブレヒトもまたこの会議とインテリゲンチャのパレードに腹をたてたが，ベンヤミンよりはるかにもとをとった，すなわちかれはかれの『トゥイ・ロマン』のための研究をした。カール・コルシュにブレヒトは書いている，『私自身作家会議に出て，私のトゥイ・ロマンのために記録することができた。例えばハインリッヒ・マンは人間の尊厳と精神の自由(「創作の問題と思考の尊厳」)に関する講演をあらかじめ検閲してもらった。いつだって想像力など及びもつかないことを認めさせられてがっかりする。[6]」1936年7月には「ロンドンにおける国際作家会議に参加,『島便り』の詩が『弁舌さわやかなる』作家,マルローとウェルズについて示しているように，ブレヒトはこの会議をまたもやかれの『トゥイ・ロマン』に利用する。[7]」アメリカに亡命してからも，[8] 1943年10月10日,「ブレヒトのもとにアドルノ滞在。フランクフルト研究所及びその研究員たちは相変らずブレヒトにとってはトゥイ・ロマンの宝庫の役をつとめる。[9]」——つまりブレヒトは『トゥーランドット』や『トゥイ・ロマン』を含む膨大な文学的集合体によって，かれが生きのびたドイツの歴史（その中心にヴァイマール共和国の歴史と，ファッシズムの抬頭があるわけであるが，さらに広くその前後を含めて）のなかで演じたイ

(6) Brecht-Chronik, Daten zu Leben und Werk zusammengestellt von Klaus Völker. Reihe Hauser74. 1971. S.63

(7) ibid. S.66

(8) 1942年4月18日の項はアメリカ自身は『トゥイ・ロマン』のために不適当な場所であることを示している,「アメリカ，特にハリウッドはブレヒトの『トゥイ・ロマン』を打ちくだく。ブレヒトは『裸』を見せるので，ここでは意見を売ることを『暴露すること』ができない。」

(9) ibid. S.105

ンテリゲンチャの役割を，ヒーマにおけるトゥイ族によって異化効果（Ver-fremdungseffekt ）を行おうとしたと言えよう。

ヒーマとは支那のことである。1919年コミンテルン成立以後（それは中国における五・四運動の年でもある),中国はコミンテルンの関心事となる。中国革命に対してコミンテルンが犯した誤謬はアルトゥーア・ローゼンベルクの『ボルシェヴィズムの歴史』にくわしく出ている。[10]「ロシア革命との連帯感がもっとも強かったアジアの国は，中国である。中国の民族解放運動は，孫逸仙が創立した国民党に体現されていた。」「ソヴィエト・ロシアは助言と行動をもって，中国国民党を支持した。」しかしコミンテルンはそれとは別に中国共産党を設立した。「1924年から27年まで，ボルシェヴィキは中国革命にたいして，二つの戦術をとることが可能だった。」「一つは，中国ではブルジョワ革命しか成り立たない，という立場をつらぬくこと。」すなわち国民党支持。「もう一つは，中国革命はすでに現在の歴史的段階において，純粋にブルジョワ的な枠を越えることが可能だ，という見解をとること。」「しかしそのさい，中国共産党は，その独自の政策を遮二無二追求せねばならぬ。」「この二つの方途のいずれも真剣に追求せず，はんぱな妥協をもとめたことが，スターリンと中国共産党にとっての禍いとなった。」この時点ではローゼンベルクにはまだ1931年の満州事変，1932年の上海事変，満州国成立，さらに1935年の大長征は見えてはいなかった。日本帝国主義の中国への侵略がいかにコミンテルンにとってソ連の危機感をたかめたかの一端は，私は『「リンクスクルヴェ」をめぐって』[11]において述べた。『バール』，『夜の太鼓』，『都会のジャングル』等の劇作によってすでに文名をはせていたブレヒトがマルクス主義にはいってゆく様は全集第20巻目の『マルクス主義研究』の始めにおかれたブレヒト自身の言葉が語っている,「私がすでに数年来名の知れた作家であった

(10) 野村修訳，晶文社，1968.243-247頁.（なおこの原本は1932年に出ているだけに，中国に関しては蔣介石の包囲攻撃で終っているという歴史的制限がある)。

(11) 神戸外大論叢第25巻第3号，40頁.

とき，私は政治についてはまだ何一つ知らず，マルクスのあるいわマルクスについての本や文章にはまるでお眼にかかってはいなかった。私はすでに四つの劇と一つのオペラを書き，それらは多くの劇場で上演された，私は文学賞をもらっていた，最も進歩的な人々の意見を求めるアンケートではしばしば私の意見を読まれることがあった。だが私はまだ政治のイロハもわかっていなかったし，私の国における公やけの事柄のルールについては寒村のささやかな農夫よりわかっているわけではなかった。〔……〕1918年には私は兵士評議員でUSPD(独立社会民主党)にいた。だがそれから，文学の世界にはいっても，私はブルジョワ社会に対する可成ニヒリスチックな批評を越えなかった。恐しい効果を与えたエイゼンシュタインの偉大な映画も，私が少からず賞讃していたピスカトールの最初の劇場的な催しも私をマルクス主義の研究に到らさなかった。多分それは私がはじめに自然科学の教養をうけたためであろう,(私は数年間医学を勉強していた),そのために私は情緒の側からの影響に対してたいした免疫性をもっていたのだ。それから私をさらに助けてくれたのは一種の職業上の不運だった。ある劇作[12]のために私は背景としてシカゴの小麦相場を必要とした。私は考えた，専門家と実業家を若干質問してまわったらただちに私に必要な知識をととのえることができるだろうと。事情はそうならなかった。誰一人，若干の知られた経済著述家も実業家も——シカゴの証券取引所で生涯働いていた仲売人のあとを追って私はベルリンからウィーンへ旅もした——誰一人私に小麦相場のいきさつを充分に説明することができなかった。私の受けた印象はこのいきさつは全く説明出来ない，すなわち理性では理解出来ない，ということはとりもなおさず全く非合理的であるということであった。穀物がどうして世界に分配されたかという方法は全くわからないということだった。一握りの投機屋の立場以外にはいかなる立場からもこの穀物市場はたった一つの沼だった。計画された劇は書かれず，その代りに私はマルクスを読みはじめた，そしてその時はじめて私はマ

(12) 『肉きりジョー』

ルクスを読んだのだ。やっと私自身の分散していた実際的体験と印象が正しく生きた。[13]」クラウス・フェルカーの『年代記』によると，1926年10月，エリザベート・ハウプトマンあてにブレヒトは「私は『資本論』のなかにどっぷりつかっています。私はそれを今やくわしく知らなければなりません……[14]」と書いている。1927年3月には社会学者フリッツ・シュテルンベルクと知り合いになり，ブレヒトのマルクス主義研究は深まる。[15] 1932年10月から33年2月まで，ノイケルンのカール・マルクス学校でカール・コルシュが「批判的マルクス主義という研究サークル」内で『マルクス主義における生けるものと死せるもの』という題で8回講義を行い，ブレヒトはアルフレート・デブリンと定期的聴講生だった。[16] こうしたマルクス主義が濃厚に浮び出ている所謂教育劇（Lehrstück）である『處置』，『例外と法則』において始めてブレヒトは中国を舞台にしている。いずれも1929－30年に書かれている点，コミンテルン，特にそのなかでも有力なドイツ共産党の，先にも述べた中国革命への関心を背景にしたものではないかと思われる。然し同じ年に書かれた矢張教育劇『イエスマンとノーマン』がアーサー・ウェイリーの謡曲『谷行』の英訳に基いており，マルクス主義に先行するブレヒトの演劇論（叙事的演劇，異化効果）が日本の能を見出していることを思えば，ブレヒトの東洋志向は時代的なものと言い切れない。事実フェルカーの『年代記』をたどっても，ブレヒトの東洋，特に中国に対する傾斜は深い。1935年春，北欧亡命中訪問したモスコウで中国の俳優メイ・ラン・ファンの演技に深く感動して，『中国の俳優術についての論評』を書いている，これは1937年に『中国の俳優術における異化効果』というエッセイに書き改めている。[17] 1942年3月23日にニュー・ヨークに矢張亡命していたカーリン・ミハエリスの70才誕生の祝

(13) Bd.20. S.46
(14) ibid. S.42
(15) ibid. S.43
(16) ibid. S.55
(17) ibid. S.61

いに次のように述べている，私たちの文学史は，例えば中国の文学史のように多くの亡命作家をかぞえあげられない，私たちはその言いわけとして，私たちの文学はまだ大変若くて，まだ充分耕されていないと言わざるを得ない。中国の詩人や哲人は聞くところによると，私たちの詩人や哲人がアカデミーにはいるように亡命生活にはいるのを常としているということです。それは普通のことだったのです。多くのひとたちがたびたび逃亡した，だが少くとも一度は生れた土地から旅立たねばならないと書くことは名誉なことであったようです。[18]」私たちはこの言葉から，ブレヒトの有名な詩『老子亡命への途上で道徳経が生れたことの伝説[19]』を見い出さずにはおれない。同じ1942年の6月，アレクサンダー・グラナッハの勧めで，ブレヒトは中国女優アンナ・メイ・ウォンを訪ねている，かの女はブロードウェイでの『ゼツアンの善人』の上演に興味を抱いていた。[20] 1943年の春，ハインツ・ランガーハンスとニューヨークの支那人街で「広東演技団」の上演を見に行っている。[21] 同年7月9日，中国人の俳優兼作家チアンがブレヒトを二つの一幕劇の上演に招待し，ブレヒトを「叙事的演劇の創始者」(founder of the epic theatre)として歓迎している。[22] 1944年11月28日，ブレヒトはアーサー・ウェーリーの『中国文からの反訳』を贈られるが,「優秀な支那学者」ウェーリーが，白楽天にとっては教育と娯楽との区別がないと批判しているゆえんに，嘲笑している。[23] ちなみにブレヒトが中国詩人中最も愛したのは白楽天であって，1938年のモスコウから出されていたドイツ亡命作家たちの雑誌『ダス・ヴォルト』に「中国詩」として，アーサー・ウェーリーから六篇の中国の古典詩を訳しているが，そのなかの四篇は白楽天のものである。アメリカ亡命からチューリッヒに帰ってきたブレヒトは1947年12月19日に支那学者兼作家のヴィルヘルム・

(18) ibid. S.92

(19) これは魯迅の『故事新編』であつかわれ，さらに花田清輝によって脚色された伝説。

(20) ibid. S. 95

(21) ibid. S. 100

(22) ibid. S. 101

(23) ibid. S. 110

トライヒリンガーと話をしている。今まで英訳（大概はウェーリー）の中国詩だけ読み，これを利用していたブレヒトは始めて所謂クンの詩集の原本を見た。ブレヒトが特に関心を抱いたのは，クンによってだけ仕上げられていない歌本の儒教的改作であった。トライヒリンガーとの話は中国演劇の特性やメイ・ラン・ファンの演技にも触れた。中国においては俳優は他人のようであればうまい，ドイツでは俳優が違った風であればうまいとされるというのがブレヒトの意見であった。[24] 1948年12月22日，作曲家のハンス・アイスラーがブレヒトに毛沢東の讃歌を与え，ブレヒトは早速仕事にかかっている。「芸術のルネサンスへの私の見当は，はるか東方の決起によって解き放なたれ，考えられていたよりも早く酬いられそうだ。[25]」中華人民共和国成立の年1949年，1月18日のブレヒトの言葉，「この数週間ずっと私の頭のどこかに，世界の面貌をすっかり変える中国共産党員の勝利があった。このことは私にとっては現在することであり，幾時間も私を熱中させる。[26]」分裂したドイツに対して東独を選んだあと，クラウス・フェルカーは何に依ったか明記していないが，1952年7月始め「ブレヒト，中国への亡命を考える」と書きしるしている。[27] 1954年に，この年で最も印象を与えた読書を問われて，ブレヒトは毛沢東の『矛盾論』をあげている。[28] 以上ブレヒトの時代を超えた中国えの傾斜を『年代記』から拾ったわけであるが，中国を題材としたものとしては以上述べたもののほかに劇作『ゼツアンの善人』(1940年)，元曲「灰闌記」に源を発する『コーカサスの白墨の輪』(1943－45年)，さらに1934年から書き始められた墨子に據る『メー・ティー又は轉換の書』という散文。『メー・ティー』は

(24) ibid. S. 120 ブレヒトは中国を愛好したが，その中国への知識は必ずしも正確なものであったとは言えないという前提のもとに，この「クンの詩集」について私の質問にわざわざ答えて下さった畏友三沢玲爾氏の言葉を附記しておく。「……ひょっとするとkungという固有名詞は，ライプチヒの漢学者August Conrady の中国名，孔好古と関係あるかも知れません……」。)

(25) ibid. S. 129

(26) ibid. S. 129

(27) ibid. S. 143

(28) ibid. S. 151

墨子の教説の解釈に発しながら，それをこえてブレヒトの生きた時代の重要な政治的現象を「中国服をまとわせて」分析している点，特にそこに出てくる「知識労働者」は「トゥイ」と重なることなどから，私がここで取扱おうとしている例の一つの「膨大な文学的集合体」にかかわってくる。

「暫定的」ながらも一応完成している劇作『トゥーランドット』から，私たちは「計画とスケッチのまま」の『トゥイ・ロマン』を窺うしかないのでははないか。私たちは劇作からロマン化の例を一つ持っている。それは『三文オペラ』だ，劇作は1927年に行われ，それのロマン化は1934年に行われている。アウグスブルク，ミュンヘン，ベルリンととびまわっていた新進作家，マルクス主義研究の緒についたばかりのブレヒトが書いた劇作『三文オペラ』と，亡命の地デンマークで書かれたロマン『三文オペラ』を較べることよりは，『トゥーランドット』と『トゥイ・ロマン』を較べることの方が困難なことであろうし，それはそれで別の問題であるが，劇作とロマンとの違いは窺い得る。ブレヒトの劇作が自らも称するように「叙事的」演劇であるかぎり，「演劇的」演劇より叙事性に接近しようとする。しかしいかに「叙事演劇」が叙事性に接近しても，演劇は演劇である。叙事詩＝ロマンのように，随時読者が頁をとじてパイプをくゆらしながら考える距離をもつことはできない。叙事詩＝ロマンにおける異化効果とは何であろうか。ロマン『三文オペラ』の随所に，叙事演劇におけるトランスパレントのように，イタリックで印刷された箇所がある。劇作『三文オペラ』に対して，ロマン『三文オペラ』は，ロマン本来の叙事性に依拠して劇作で行い得なかった委細をつくすことができるのではないか。つまり「暫定的」な『トゥーランドット』が，後に述べるように，飽くまでゴッツィ＝シラーの『トゥーランドット』の筋書の枠内で創られているのに対して，「計画とスケッチのまま」の『トゥイ・ロマン』がブレヒトの生きのびたドイツの重要な歴史をトゥイ族を軸に「委細をつくして」語られる筈だったと言えよう。それは劇作『三文オペラ』から，ロマン『三文オペラ』を思うときに如何に困難な仕事であったか想像できる。そ

の困難は『トゥイ・ロマン』の後記を書いた編者のクラウス・フェルカーの次のような言葉からも窺えよう,「カリフォルニア亡命という新しい還境が新しい材料を供給するので，この小説への熱中が増加するとともに，ブレヒトには，包括的計画に対して筋書を，それとともに表現形式を見出すことの困難が大きくなった。1942年相変らず筋書が欠けたままであったとき，ハンス・アイスラーは次のようなストーリィを提唱した,『一人の金持ちの老人が，世界中の悲惨に心安らまずに死ぬ。かれは遺言状で，悲惨の根源を究めるための研究所設立に巨額を寄附する。悲惨の根源は勿論かれ自身なのに……』[29]」。

ブレヒトの『アンチゴーネ』が，ヘルダーリン，ソフォクレスとさかのぼるように，かれの『トゥーランドット』はシラー（1759—1805),カルロ・ゴッツィ（1720—1806）にさかのぼる。等しくコメディア・デル・アルテの伝統をつぎながら革新的なカルロ・ゴルドーニに対して保守的なゴッツィのフィアーベ・ドラマティケ（メールヘン劇）は，ルードヴィヒ・ベラーマンによれば[30]，ドイツにはまずレッシング,「シュトルム・ウント・ドラング」のクリンガーによって導入されたが，1777—79年に，ヴィーラントの寵児フリードリッヒ・アウグスト・ヴェルターによって『C・ゴッツィ劇作集』が散文訳で出た。次いで舞台上演の欲求が高まり，ヴェルター訳に基いて，ゴータ宮廷劇場をはじめとして方々で上演されるようになった。ゲーテの支率しているヴァイマール劇場も，1802年1月にシラーの脚色になる『トゥーランドット』を上演している。シラーは1801年病気になり，自分の仕事ができないので，やはりヴェルター訳を基にして脚本を書いたわけである。ゴッツィの原本を私は読んでいないが，ベラーマンによれば，シラーの脚本は筋においては変りないとのことである，ただベラーマンはゴッツィとシラーの作品を較べて二つの相異点をあげている。その第一は女青鬚ともいうべき主役トゥ

(29) Bd.12. 4－5＊Anmer uugen

(30) Mayer Klassiker-Ausgabe のSchillers Merke (hrg. von Ludwig Bellermann) の第12巻のTurandot (Prizessin von China, Ein tragikomisches Märchen nach Gozzi)の編者による序文

ーランドット姫がその美貌にひかれて世界のいたるところから求婚にやってくる王子たちに三つの謎をかけ，解けなければ首を切るという條件で片っぱしから王子たちの首を切るのは，ゴッツィにおいてはただ残酷な「気まぐれ」であるのに対して，シラーにあっては「熟慮のうえ」のことである，すなわち人間的に動機づけられているのだとする。それは傲慢な男性への侮辱された女性の復讐である。事実第2幕でシラーのトゥーランドット姫ははっきり次のように言っている，

私はアジア全体に女が卑しめられ
奴隷の軛に定められているのを見る，
そこで私は私の侮辱された同性のために
あの傲慢な男たちに復讐するつもりだ，
男たちはより優しい女たちに対して
粗暴な強さ以外の取りえはないのだから。[31]

従ってベラーマンによれば，ゴッツィでは考えられないことだが，傲慢でない男性アストラカンの王子カラフに対する愛で終っている。一方コメディア・デル・アルテの伝統をつぐフィアベ・ドラマティケにおける傍役である仮面をかぶったパンタローネ，タルタリーア，トゥルファルディン，ブルゲルラは，その伝統のないドイツのシラーにおいては生かし切れていない。ベラーマンの指摘する第二の点はシラーはこの作品を，先行者の散文に対して，五脚のヤンブスで書くことによって文学的形式を高めているとする。しかしこの点においても，ゴッツィでは以上の仮面役がコメディア・デル・アルテに由来する即興性を充分発揮できるように散文であったのだ。詩形のなかにかれらはその自由を束縛されてしまったと言えよう。要するにヴァイマールの古典的ヒューマニズムが，それとは異質な外面的面白さに生きるフィアーベ・ドラマティケを人間的に内面化しようとしたのが，シラーの『トゥーランドット』であろう。

(31) ibid. S. 36

ブレヒトの『トゥーランドット又は潔白証明者会議』が1930年に主役にカローラ・ネーエルを当てて書き始められたときはどのようなものであったかわからないが，私たちの見ることのできる「暫定的」作品においては，ゴッツィ＝シラーの『トゥーランドット』は「トゥイ族」を描くために利用された筋書と言えよう。その限りにおいては，主役トゥーランドット姫は，シラーの人間性ではなくて，ゴッツィの「気まぐれ」にもどり，シラーにおいて成功しなかったゴッツィの仮面役（道化）がトゥイ族として活気をとりもどしている，というよりはむしろ正面に据えられている。シラーの解かれるべき三つの謎は，それぞれ「夜と昼とのある一年」，人間の「眼」，「犁」といった民話的解答で答えられる謎であるが，ブレヒトの「潔白証明者会議」に課された謎は「木棉はどこにあるか」である。マンチュー国の農夫を租先とし，その租先のまとったぼろ外套が寺院にまつられている皇帝が支配するヒーマ（支那）の今，豊作であったはずの木棉が著しく不足して不安な状態にある。それは皇帝の弟ヤン・ユェルが，木棉の価格をつりあげるために，倉庫にねかしているからである。これは既に述べたブレヒトをマルクス主義研究におもむかせた小麦相場の問題である。ブレヒトにおいて終始出てくるテーマは，あの敗戦でしかも大恐慌直前のドイツにおける食料（パン）不足に対して，アメリカではそのパンの原料である小麦ができすぎて焼かれているという資本主義の不可解な事実である。ここでも皇帝とヤウ・ユェルの間で次のような会話がとりかわされている，

皇帝　……お前はどこにいたのだ。

ヤウ・ユェル　田舎ですよ。私は数バレル（の木綿）を焼きはらおうとしていたのです。

皇帝　何のためだ。そんなことは許さないぞ。なぜお前はここにじっとしていないのだ。

ヤウ・ユェル　それ以外どうして価格をつりあげるつもりですか。

皇帝　だが焼きはらう方法はいかん。高値で売るために何もなければ，高

値が何の役にたつというのだ。

ヤウ・ユェル　私と議論なさりたいのなら，まず経済を御勉強なさい。……[32]

『メー・ティー』に「木綿の価値」という文章がある，その文章はメー・ティーの次のような言葉で結ばれている,「今日は百年前より三千倍の木綿がとれる，しかし値段は同じである。木綿の値を高くするのは天候の急変ではなくて，投機師たちだ。木綿を安くするのは発明ではなくて,『大変革』であろう。[33]」国の不安を除くために，この国のあらゆる知識労働者，すなわさトゥイ族に対して,「木綿はどこにあるか」という謎を解く会議がペキンで開かれる。謎を解いたものはトゥランドットを后とすることができるが，解けなかったものは首を切られる点はゴッツィ＝シラーの筋が生かされている。会議は4日間続く（第5幕）。帝国大学の学長キー・レーにはじまり，次いで神学者，次いでトゥイ学校の校長であり，トゥイ同盟の会長ヒー・ウェイ，そして最後に大トゥイのムンカ・ドゥ,（シガツェのタシイ・ルンポ修道院から地理学者パウデル・ミルも参加することになっていたが手遅れ）。パウデル・ミルを除いて全員謎を解き得なかった，つまり誰もが知っている木綿隠匿をうまく言いくるめることができなかったので首を切られる。キー・レーは帝国大学の学長らしく，木綿の学問的定義にはじまり，さらにそれを必要としている人民とは何か，その人民の職業を厳密にすべて列挙したあげく，短い結論として木綿は天候不順のために育たなかったと言う。神学者の演説は表に出てこないが，論旨は「衣装は少ければ少いほど，健康になる」ということ。トゥイ同盟の会長ヒー・ウェーは人民の勤労の賜ものとして木綿は豊作であったが，それは輸送中に紛失したと述べて，会場を湧かすが，それ以上追求しないで急に牟先をかえ，昔は貧しかったが，皇室が木綿生産を引きうけるようになってからは，村々にも「文化」が滲透して行ったと述べ，ヒー・ウェー自らの考案になる紙衣裳をまとったトゥーランドットの登場とともに，人

(32) Bd. 5. S. 2225 f.

(33) Bd. 12. S. 550

民も木綿衣裳の代りに紙衣裳を着るようにすすめる,「最も高貴な，最も神聖な材料，私たちの思想家と詩人が高めた材料，紙」[34]の衣裳を。最後の大トゥイのムンカ・ドゥはトゥーランドットの気まぐれで徹夜させられて，混乱した頭で，問題は木綿ではなくて，木綿についての意見の自由であると叫び，さらに問題はどこに木綿があるかではなく，どこに道義があるかである，ヒーマ人民がその無数の苦しみを耐えることができたあの明るい諦め，あの伝説的な忍耐はどこに行ったかということだ，そして最後に場内にいるかも知れない人民の解放者カイ・ホーに向って叫ぶ,「私は君に，私の意見を述べることができる自由を要求する，わかるかね。私にとって問題なのは皇帝の倉庫にある木綿ではなくて，自由なのだ。」[35]この会議場のそとでは二つの重要なことがおこっていた。上に触れた人民の解放者カイ・ホー[36]が刻々ペキンに近づきつつあること。現にこの会議中にも若いトゥイ，メー・ネーを中心にビラがまかれ，かれらは逮捕される。一方トゥイに成り上ろうとしてトゥイ学校を三回も受験して落第する[37]町のギャングの首領ゴーガ・ゴークも一味とともにたびたび会場にはいろうとするが阻止されている。気まぐれなトゥーランドット姫はこの町のギャングに興味を抱き，第7幕a ですぐ辞職すると口走る皇帝の位を弟のヤン・ユェルが簒奪しようとするとき，ゴーガ・ゴークに皇帝を助けてもらう。ゴーガ・ゴークは今やギャング団と皇帝の軍隊を一手におさめる，そして第7幕b で部下にむかって次のような演説をぶつ,「今しがた明らかになったように，皇帝の倉庫は天井まで木綿で一ぱいだ。恥知らずな連中はつい数日前，最近開かれた大会議で木綿はないという嘘っぱち

---

(34) Bd. 5. S.2228

(35) S.2235

(36) 書物でしか中国を知らなかったブレヒトは中国のなかにしばしば日本語をまぎれこます，たとえば『トゥーランドット』の貨幣単位はイエン（円）であり,『トゥイ・ロマン』においてはリキシャ（人力車）が登場する。

(37) 三回も受験してアメリカ市民権を得るイタリア移民のことを書いた『民主的裁判官』という詩をアメリカ亡命中ブレヒトは書いている。同じモチーフを謂わば明暗に使いわけていると言えよう。 Bd.10. S.860

な主張をばらまいた。奴らはそれ相当の罰をうけた。今しがた皇帝の背後でその木綿を隠匿していた皇帝の弟ヤウ・ユェルは逮捕されて銃殺された。奴は奴の犯罪を秘密にしようと木綿の一部を焼きはらおうと計っていたのだ。そんなおっかない計画はもはや実現されなかった。仲間たちよ。恥知らずな軍閥は今皇帝に，お前たちやお前たちの奉仕は必要ないと口説こうとしている。おれはだから，当然皇帝の許可をもらって，すでにおれたちの運動の始めの頃のように，どこからでも見える手本を打ちたてねばならない，どんな馬鹿な奴でもその手本から，充分な力のある守りなくしては私有財産などというものはもはや安全ではないことがわかるのだ。この目的のためにお前たちは今夜にでも倉庫の一部，しかもその半分に放火しろ。」[38]この放火が，ブレヒト一家を14年間の亡命に追いやった1933年2月28日のナチスによる国会議事堂放火に重なる。私たちはブレヒトの『トゥーランドット』の中心をなす「潔白証明者会議」を，ファシズムの脅威を前にしておこなわれた二回の文化擁護国際作家会議とまた重ねて考えざるを得ない。私たちはこの二回の会議の模様を最近（1974年12月）に出た三一書房の『資料世界プロレタリア文学運動』第6巻で窺い得る。すでに述べたように第一回の会議は1935年6月にパリで行われ，23日のその第4回会議でブレヒトは『野蛮に対する闘争に必要な確認』という演説を行っている。ブレヒトが1936年6月のロンドンにおける国際作家会議にも出席したことは既に述べた。ロンドン会議の決議によって開かれた第二の国際作家会議は1937年7月に主として内戦の地スペインのマドリードとバルセロナで行われた。フェルカーの『年代記』によると，「(マドリードへの）旅をブレヒトは余りにも危険だと見なし，演説を書いて，代読してもらった。」[39]ちなみに『年代記』は，コペンハーゲンの王室劇場の女優で，デンマーク亡命のブレヒトを助け，ブレヒトと『おふくろ』を上演し，以後ブレヒトと行をともにすることになる「ルート・ベルラウにはブレヒト

(38) S. 2247

(39) ibid. S. 68

の『要心』が大袈裟に見え，かの女はミハイル・コルツォウと合流してマドリードに飛ぶ。『おふくろ』に出演したデンマークの労働者俳優の数名もスペインに行き，国際旅団にはいって戦闘している。——スコフスボルストラントで詩人キン・エィーはかれの『妹』，つまりかれの愛するライトゥのことを心配して，かの女のスペインからの帰還を不安のうちに待つ。かれは『朝に夕に読むべき』詩をマドリードに送っている。自分の心配性の故にブレヒトは自分を『臆病な人々』に数えている。[40]」キン・エィーは『メー・ティー』においてはブレヒト自身のことで，『メー・ティー』はルート・ベルラウをあつかったとおぼしい「ライ・トゥー物語」で閉じられている。ライ・トゥーに対しては自分を「臆病な人々」に数えているが，文化擁護国際作家会議に対しては，既に述べたようにこれを『トゥイ・ロマン』に利用する態度で臨んでいるし，何よりもそこで行われた二つの演説は，この会議自身作家の「人民戦線[41]」の線で行われているにもかかわらず，これを『トゥイ・ロマン』に利用せざるを得ない調子につらぬかれている。すなわち第一の演説は菅谷規矩雄氏の要約を使わしてもらえば，「革命という原理への固執と，西欧文化の危機を熱狂的に説く人びとへの痛烈な批判[42]」と言えよう。菅谷氏も引用しているようにそこでブレヒトは次のような発言を行っている，『私が諸君の注意を引きたいのは，それらの権力者たちと有効に，そして何よりもかれらの息の根をとめるまで闘おうとすれば，私の意見でははっきりしておかなければならない唯一つの点です。」「ただ文化のためだけ語るということをやめよう。

---

(40) ibid. S.68

(41) 1928年コミンテルン第6回大会における「第三期論」，つづいて1929年コミンテルン第10回プレナムにおける「社会ファシズム論」によって，明白に社会民主党及び第2インターを「社会ファシズム」と規定したモスコウは，社会ファシズムへの敵対によってファシズムの抬頭を許した。ファシズムに対する抵抗は共産党，社会民主党の「下から」おこってきた。「下から」の運動に押されて，「上」もまたこれを認めざるを得なかった。1935年コミンテルン第7回大会は「人民戦線」を追認せざるを得なかった。竹内良知編「人民戦線」，平凡社，参照。

(42) 菅谷規矩雄「ベルトルト・ブレヒトの亡命文学」，阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』6号，1964，40頁。

私たちは文化をあわれもう，だが私たちはまず人間をあわれもう。人間が救われるなら，文化は救われる。文化は人間のためにあるのではなくて，人間が文化のためにあるのだという主張には私たちはおさらばしよう。そういう主張は，屠殺用家畜は人間のためにあるのではなくて，人間が屠殺用家畜のためにあるのだという大市場の実際を余りにも私たちに思いおこさすことだろう。」「同志諸君，諸悪の根源についてよく考えてみよう。」「私たちは友人たちのなかでファシズムの残酷さに私たち同様驚いているが，私有財産制を維持しようと欲したり，その維持に無関心な態度をとるひとたちはこんなにも優位をしめている野蛮に対する闘いを力強くはまた長くは行い得ない，というのはかれらは野蛮が余計者であるような社会を口に出して言い，それが来るように手助けをすることができないからである。[43]」マドリードで代読された演説は，スペイン戦争という現実を眼前にして，パリの演説をさらにアクチュアルなものにしている。「今から四年前に私の国で一連の恐しい出来事が演ぜられたが〔中略〕(ファシズムの) 暴力行為は嫌悪の情をもよおさせた。それにもかかわらずその大きな関聯は嫌悪の情にみたされた多くのひとびとには全く不明のままであった。」「スペインにおける恐るべき経過，公の町や村の爆撃，全住民の虐殺は今や次第に，基本的にはこれにおとらず恐るべきではあるが，ただそんなに劇的に見えない経過，ファシズムが権力を獲得した私の国のような国々で当然演ぜられていた経過の意義に対しては人々の眼を開かせる。」「もしそうならば，もし文化が各国の民衆の総生産性とわかちがたいものなら，もし同一の暴力的介入が各国民からバターとソネットを奪い去ることができるなら，したがってもし文化がそんなに物質的なものであるならば，そのときは文化の擁護のために何がなされねばならないであろうか。」「抑圧の断罪は抑圧者の一掃で終らねばならない，暴力の犠牲者へのあわれみは加害者への容赦なさに，同情は怒りに，暴力に対する嫌悪そのものが暴力にならねばならない。特権階級同様個人の暴力に暴力が，民衆の完全

(43) Bd. 18. S.241ff.

な蹂躙する暴力が対置されなければならない。」「これらの戦争に対して，私たちが話したあの他の戦争同様に戦宣布告がなされねばならない，そしてその戦争は戦争として遂行されねばならない。文化，長く，余りにも長くただ精神の武器でのみ擁護されてきたが，物質の武器で攻撃され，みずからただたんに精神的なだけではなくて，またそして特に物質的事柄でもある文化は物質の武器で擁護されねばならない。[44]」二つの演説を貫く二つの態度のうさの一つ，菅谷氏の謂う「革命原理への固執」(菅谷氏は「存在する社会主義国家の擁護，ロシア・ソヴェトの防衛という当時の最も主要な問題」を後革命的であるとすれば，当時のブレヒトは前革命的であると言う）はパリ演説では「諸悪の根源は私有財産制にある」という点に集注しているし，マドリード演説では，両演説を貫くもう一つの態度，菅谷氏の言葉を借りれば「西欧文化の危機を熱狂的に説く人びとへの痛烈な批判」と深くかかわりあっていることだが,「文化の破壊に対する文化それ自体の武装」,「支配階級の暴力に対抗すべき人民の暴力」,「侵略戦争に対する人民の側からの宣戦」という菅谷氏の謂う「人民の武装蜂起，内乱から革命へ」と言うことができよう。この「前革命的」「革命原理への固執」は，ことに私有財産制を諸悪の根源と説いたパリ演説はあきらかに，久しい敵対性を解いて共産党と社会民主党が「人民戦線」を組んだ段階にあっては，時代逆行的ラディカリズムが感じられる。だがその演説の私有財産制を突いた箇所の前後を含めて訳すとこうなる,「まだ大層若い私たちの遊星（地球）のうえの次第に大きくなってゆく人間大衆の心をとらえている一つの偉大な教えは今や，諸悪の根源は私たちの私有財産制であると言っている。この教えは，すべての偉大な教え同様素朴に，既成の私有財産制と，それを擁護する野蛮な方法のもとで最も多く苦しんでいるあの人間大衆の心をとらえてきた。その教えは，地球面積の六分の一をなし，そこでは被抑圧者と無産者が支配を握った一つの国で実行に移されてい

(44) Bd. 18. S. 243ff.

る。そこではもはや食料品の破壊も文化の破壊も存在しない。[45]」諸悪の根源が私有財産制であることを教えた偉大な教えであるマルクス主義が「実行に移されている」国，ソ連に対する希望がここで語られているわけである。そしてこの作家大会が作家の「人民戦線」の線で行われたとしても，この作家大会に出席したソ連の作家[46]に対する「希望の国」からの使者としての熱烈な歓迎の様は『資料世界プロレタリア文学運動』第6巻の議事録から読みとれる[47]。当時すでに進行していた大粛正に対して抱かれた「希望の国」への疑惑を示す詩篇『人民は誤ったことがないか[48]』などにもかかわらず，1956年3月に死んだブレヒトは，1953年のスターリンの死，1956年の第20回党大会（スターリン批判）を消化することなく，「希望の国」ソ連の一枚岩の重い呪縛から脱することはできなかったのではないか。従ってパリ会議におけるブレヒトの演説の「革命原理への固執」は必ずしも，会議全体のなかで著しく不調和なものとは言えないのではないか。不調和はむしろ，スペイン戦争という現実を眼前にしてアクチュアルになったブレヒトの演説の「人民の武装蜂起，内乱から革命への転化」といった「革命原理への固執」のパトス化とライ・トゥー＝ルート・ベルラウ「物語」との対比である。それは『ズヴェンボル詩集』で言うならば，例えば5部の『ドイツ諷刺詩』と6部の亡命の詩との対比とも言えよう。6部の亡命の「現実」の詩はそれの類似のものとともに，「革命原理への固執」とは違って，読者の心をおだやかに打つ。私はこんな詩すら見つけた，

私は聞いた，惨めなものたちは明日の主人である

ということは当然のことだと，それは一目瞭然だと。それを

---

(45) Bd. 18. S. 245

(46) T. パンフョーロフ，コリツオフ（前述のようにやがてルート・ベルラウとマドリード大会に出席した作家。後に粛正される），イリヤ・エンレブルク，アレクセイ・トルストイ，チーホノフ，キルション，パステルナーク，バーベリ等，ゴーリキーはメッセージを送っている。

(47) 目立つのはヴィクトル・セルジェをめぐってのトロキスト一団に対する議場の激しい反感。

(48) Bd. 9. S. 741

私は見出すことができない。[49]

第二回作家大会のためにマドリードにおもむいて戦っているルート・ベルラウを，自分を「臆病な人々」に数えながら，スコフスボルストラントで待っていたキン・エィーによって書かれた「ライ・トゥー物語」は亡命の「現実」を歌った詩と同じように，読者の心をおだやかに打つ。菅谷氏のように，ここから「革命原理への固執」から離れた「亡命文学」を発展さすことは別問題である。だが私はもとにもどって，作家会議の両演説を貫くさらにもう一つの態度，すなわち菅谷氏の謂う「西欧文化の危機を熱狂的に説く人びとへの痛烈な批判」に触れよう。そしてこれこそ両演説の基調ではなかったかと思う。その「痛烈な批判」はパリ演説では「文化は人間のためにあるのではなくて，人間が文化のためにある」かのように考えている文化人批判であり，マドリード演説では「バター」と「ソネット」は別ものだと考えている文化人批判である。前者は「人間が屠殺用家畜のためにあるのだという大市場の実際」に疑いを抱いたことのないひとびとであり，後者は文化が「物質的事柄」であることを全く知らないひとびと，つまり文化は「精神」以外の何ものでもないと信じているひとびとである。この基調から，パリ演説の「諸悪の根源は私有財産制である」も，マドリード演説の「文化は物質の武器で擁護されねばならない」も，つまり「革命原理への固執」が生れてくるのではないか。文化擁護国際作家会議をブレヒトが終始「トゥイ・ロマンに利用」したということも符合する。文化を精神であると考えていた文化人は，かれらがいかに進歩的に見えようとも，すべて「トゥイ族」である。「木綿はどこにあるか」という私有財産制にもとずいた市場の実際という極めて「物質的事柄」を精神で解こうとして集ったトゥイ族の「潔白証明者会議」は，その限りにおいてゴーガ・ゴークのファシズムに呑み込まれてしまはざるを得なかったのだ。

ブレヒトの『トゥーランドット』には，以上述べたほかに，皇帝に陳情にき

(49) Bd. 9. S.752

ながら，その前で絶えずカー・マー（カール・マルクス）を引用したがら論争対立し，遂にゴーガ・ゴークにつぶされてしまう「衣裳製造者組合」と「衣裳なし組合」[50]とか，知識売買のトゥイ市場や『トゥイ・ロマン』でも目論まれていたトゥイ学校の場面等が出てくるが，それらのなかから私はこの劇に終始登場する孫エー・フェーを連れてゼツアンの田舎から出てきた農夫，白ひげの老人ゼンに触れておきたい。ギャングのゴーガ・ゴークが，あくまで洗濯女の身分にとどまる母のマ・ゴークに対して，トゥイ階級に成り上ろうとして，トゥイ学校に不正入学しようとしたのに対して，ゼン老人は晩年せめて思想を得たいと思ってトゥイ学校にはいるが，トゥイ学校の実体に幻滅し，すべてトゥイ学校の卒業生であるトゥイ族の会議を眼のあたりに見て，心は次第にカイ・ホーに向いてゆく，そして9幕目でペキンを去るに際して，孫に次のような言葉を言う，「エー・フェーよ，わしの反省はすんだ。旅に出よう。ここで買える思想は悪臭がする。国中不正が支配している，そしてトゥイ学校で学ぶことは，なぜそうならねばならないかということだ。たしかにここでは最も幅広い河に石の橋が架けられる。だがその橋のうえを権力者は乗物にのってわたり腐敗におもむき，貧しいものはその橋をわたって隷属におもむく。たしかに医術は存在する。だがあるものたちがいやされるのは不正を行うためであり，あるものたちがいやされるのは，不正を行うもののためにあくせく働くためだ。見解が魚のように買われ，そして思想は悪評におちいる。あの人は考えているということだが，どんな卑劣なことを考え出すことやらという有様だ。それでも考えるということは，なし得るかぎり最も有用で最も快的なことだ。だが考えるということに何がおこったのか。あのカイ・ホーは勿論むこうにいる，私はここにかれの小冊子をもっている。私がかれについて今まで知っていたことは，馬鹿者たちがかれを馬鹿者と呼び，詐欺師がかれを詐欺師と呼んでいることだけだった。だがかれがいて考

(50) 後者は下から上への自由を唱える点，ローザ・ルクセンブルク的であり，後者は上から下への規律を唱える点でレーニン的。

えたところでは稲と綿の大きな田畑があり，人々は喜んでいるようだ。ひとが考えて，人々が喜ぶなら，エー・フェーよ，その人は良く考えたに違いない，これがそのしるしだ。……。[51]」ここに私たちは〈考える〉ことからマルクス主義にはいっていったブレヒトが〈考える〉ことを否定しているわけではないことを知る。〈考える〉ことはむしろ「なし得るかぎり最も有用で最も快的」なことなのだ。問題はトゥイ族のように悪しく考える（ Denkismus ）ではなくて,「良く考える」ことだ。

「計画とスケッチのまま」の『トゥイ・ロマン』については，すでにそれが如何にブレヒトが生きのびたドイツの歴史をトゥイ族を軸に「委細をつくして」語られる筈だったかは述べた。全集第12巻の『トゥイ・ロマン』は次のようなブロックからなっている,「大筋，視点，計画」,「四つの旅」,「トゥイ族とトゥイ学校」,「トゥイ族の黄金時代」,「トゥイ共和国の歴史へのその他の寄稿」,「トゥイ族の没落と終焉」,「トゥイ論文」,16篇の「トゥイ物語」,付録としてトゥイ集合体からの二篇の詩。「大筋，視点，計画」の「計画」はさらに6つに分かれているが,その第6番目「トゥイ族時代のヒーマの歴史」は次のような文章である。「(トゥイ族時代のヒーマの歴史は）本来のロマンに絶えずちりばめられる。大文字で印刷。このロマンのトゥイ族はだから実際の政治家であってはならない，このロマンはフンとクワンのトゥイへの教育であり得る。[52]」つまり『トゥイ・ロマン』の断片は二つに分けることができるのではないか。すなわちフンとクワンの本来のロマンの僅かの断片と，ヒーマ，つまりヴァイマール共和国の歴史に関するおびただしい断片とに。

フンとクワンに関しては，まず『四つの旅』の三番目，すなわち二番目の旅の中心人物ターシ・ラーマ（チベットからペキンへの旅）の先遣隊が船尾を占める舟旅のなかに，二人はペキンのトゥイ学校に入学すべくまじってい

(51) Bd. 5 . S.226f.

(52) Bd.12. S.594

る。フンは上流階級出身らしく，クワンは労働者の息子である。この船尾には一人の背の高い，細せた男がいて，船尾の衆望を集めている。「クワンが気附いたことは，フンが食事のさい，しゃべるときはいつもその背の高い男の態度をとっていることであった。この態度は控え目で素朴なフンにも，対象物の性質にも合ってはいなかった。フンにはこの態度がかれの言葉ではなく，かれの言葉が態度に合っているように見えた。はじめはこのことはクワンには正しいとは思えなかった，次いでかれが認めたと思ったことは，フンがこのようにして全く新しいそして興味ある認識に――たんに言葉だけではなくて――に達したことだ，そしてクワンは今やかれの友人がかくも速かに容易に学んだことを感嘆した。[53]」だがクワンの関心は，トゥイ族ではないもっと下の階級が乗っている船首にむけられる。ここでクワンが見たものは，『四つの旅』の一番目である地下運動を行っているらしい五人の旅人をめぐっての警察の手入の事件である。次いで『四つの旅』の謂わば付録的な『船上でクワン，さらに旅体験をする』において，戦争で負傷した兵士たちが乗りこんでくる。船尾のトゥイ族は冗言に兵隊言葉で呼びかけ，「私たちはすべてこの健気な者たちに負うている。かれらは一瞬も反省することなく，かれらの犂を棄てた，かれらが棄てたのは靴屋の突きぎりであり，織機の梭であった，それというのも文化を擁護するためだった。かれらはイー・イエン（シラー）の傑作も知らなければ，ゴー・テー（ゲーテ）の詩も殆んど読んだことがない，かれらはただ文化が野蛮な敵によって脅かされていることを聞いて立ちあがったのだ。[54]」兵士たちは答えない。クワンが近づいて行った背の高いやせた兵士は制服の上衣にたかっている虱をとりながら，虱が素早いので捉えにくいと言っている。クワンはトゥイ族のいる船尾にもどるさい，つまずいて兵士たちに笑われ怒ったが，「奇妙なことに，丁度就寝のために歯をみがいているフンの方に歩みよって行ったときにこういうことに気附いた，すなわち

(53) ibid. S.603f.

(54) ibid. S.608

怒りにもかかわらず，歩行においてあの背の高い兵士のゆっくりとした大ぶりな動きを摸倣していることだった。しかもかれは兵士が歩くのは一度も見たことがなく，見たのはただ兵士がしゃべり，虱をとっているのだけだったのに。[55]」ついでフンとクワンが入学するトゥイ学校が，『トゥイ族とトゥイ学校』という標題で，断片的に述べられている。この部分は『トゥーランドット』の第4幕の『トゥイ学校』と共通するわけであるが，勿論「委細をつくして」語られる筈だったようである。断片としては『教材』，『秘書学校への到着』，学校正面玄関のうえには「知は力なり」と書かれてあり，この国のトゥイ族を輩出した由緒のある，従って贅沢な施設のある学校である。クワンは「七つの試験を経て獲得した奨学金で学校にかよい，かれの地方がかれのために出してくれた金額が非常に高いことを知っていた。」従ってクワンにとってはトゥイ学校にはいることは「贅沢な暮し」にはいることだった。『昼食時のトゥイ学生の物語』，そばかすだらけの青年が笑いながら一人の貧しい下級生の噂話をする，（その下級生は）クラスでビリだった，理由はかれは家で予習するかわりに母親の下着縫いの手伝いをしなければならなかったからだ。そこでかれは読む力がなかったので試験で二度落第した。かれはそのことを母親に打あける勇気がなかった，というのは母親はいままでにもいつも学費のことをぐちっていたが，父親のために学費を払いつづけていたからだ。父親は戦場にいて，『知は力なり』[56]という格言を高く評価していた。母親は息子をいつも兵営にかかげられていた戦死者名簿を見にやらせたが，お父さんの名前は出ていないという喜びの知らせをいつももって帰ってきた。実際はかれは見に行かなかったのだ，字を読むことができなかったからである。最近だがかれはいくらか進歩して，初等試験に合格した。ある日突然かれは今や自

---

(55) Bd.12. S.609

(56) この格言はトゥイ学校の講堂に銅像となっている卒業生の哲学者に由来する。この哲学者はかれの友人で保護者である人を裏切り，王から酬いに高い地位を得た。晩年汚職によって議会で糾弾されたが，王の裏をよく「知っていた」ので，王から特赦を得たのだ。
ibid. S.616

分は読むことができることに気づいて，兵営に行った。半年前の名簿のなかにかれは父親の名前を見出した。母親はかれをすぐに退学させた。[57]」この噂話の退学させられた下級生は，クワンであるという別の話が『労働者ユェンの四つの夢「一人の労働者が息子をトゥイ学校から退学させる[58]」』である。クワンの父はユェーメル地方の絹織物工場の労働者で，過労のために40才という年よりはるかに老けている。しかしかれは自分の世代は無理だとしても，息子の世代の労働者の未来を信じているので，無理をして息子のクワンをペキンのトゥイ学校に送っている。だが突然かれは荷づくりして，工場に休職届を出してペキンの息子のところへ行く。そして驚く息子にもう学校を退学して帰れと言う。理由は四つの夢を見たからだ。第一の夢はかれが警察に書類をもらいに行った夜，昼かれに対応した眼鏡をかけて肥えた男が息子のクワンで大変親切にあつかってくれた夢だった。第二の夢では同じく警察に書類をもらいに行ったが，今度は息子のクワンは父親の自分が列のなかにいることを知りながら，時間だから明日来いと言って柵をさっさと閉めてしまった。クワンがトゥイ学校に入学した年の後期に，警察が非合法のビラの件でユェンが勤めている工場に来て，全員広間の壁のところに立たせ，一人づつ訊問した。ユェンの隣にはクワンの従弟の十四才のフェンがいた。疑わしいものは外にひきずり出されて，鞭で打たれた。その晩ユェンは第三の夢を見た，昼間の若い取調べの役人はクワンであって，ユェンは息子に疑わしいとされて，中庭に息子に引っぱり出されて，息子に鞭打たれた。第四の夢はその翌日，工場で，明るい午前，眠ってもいないのに見たのだ。クワンの従弟のフェンとむかいあって仕事をしていた，そこへ昨日と同じように取調べの警察官としてクワンがやってきて，従弟のフェンを中庭に引っぱり出させた。中庭からフェンの悲鳴が聞えてきた。「だがお前は私の前に立っていて，冷やかに聞いていたのだぞ，この呪われた奴め，根性まで腐りきった奴。お前が私

(57) ibid. S. 617
(58) ibid. S. 717ff.

を，お前の父である私を打つのならいい，私は年寄りだ，だがなぜお前は，お前より若いフェンを打つのだ。こん畜生，そんなことが続いていいものか。お前だけがどんどん登っていって，フェンは下にいるということを私は忘れることはできないだろう。」そしていきどおりのあまり震えながら立ちあがり，大声でわめいていた老人ユェンは突然自制して言葉をきると，より落着いた声で言った，「クワン，荷物をまとめて，私と戻るのだ。私たちは今晩帰ろう。」『四つの夢』で，トゥイ学校入学以前にすでにフンは船のなかで衆望を集めていたトゥイの態度を摸倣していることからも，かれがやがて『トゥーランドット』に登場するムンカ・ドゥのような「大トゥイ」になることは予想される。ブレヒトはしかしこのフンとクワンの謂わばヴァイマール共和国を背景とした教養小説においては，断片のかぎりではクワンを追っている。フンに対して「虱取る兵士」の態度を真似るクワン，ユェーメル地方の絹織物工場の労働者の息子であるクワン。このクワンは老若の違いはあるが，『トゥーランドット』におけるゼツアン地方から晩年思想を学ぶためにトゥイ学校に来た農夫ゼンに通じるものがありはしないか。いずれにしても「本来のロマン」である「フンとクワンのトゥイへの教育」に関する断片は以上で尽きている。だが「計画」の第5番目「トゥイ・ロマン」は，このロマンの一層具体的な構想を垣間見させる。第1巻は「トゥイ族の黄金時代／トゥイ物語」となり，第2巻は「トゥイ族の追放／トゥイ族は（私有財産性の代りに）文化を救おうと試みる」となり，これに相当する第2書は「フー・イー（ヒットラー）によるトゥイ族の追放。すべてはトゥイ学校において進行する。校外では迫害が始まっているのに，黄金時代のトゥイ族の行為が物語られる」となっている。第3巻は「トゥイ族の劃一化／悪の根源」となり，それに相当する第3書として「フー・イー支配下のトゥイ族。一部は追放され，一部は中華帝国のなか。諸概念の混乱は今やフー・イーによって取り除かれている。国中のトゥイ族は建設する。国外のトゥイ族は相変らず痙攣的に古い概念にしがみつき，悪の根源を呼び出し，悪を呪っている[59]」となっている。つ

まりヒットラーによるトゥイ族追放もこの計画によれば，フンとクワンが入学したトゥイ学校のなかで語られることになっていたわけである。フンとクワンに関しては以上で尽きるが，ヒーマ共和国のトゥイ族を輩出し，以上述べた理由からも重要性をもつトゥイ学校に関しては，既に述べたように「トゥイ族とトゥイ学校」のブロックと『トゥーランドット』のトゥイ学校の場面から窺える。いずれにしても「フンとクワンのトゥイへの教育」，この一種の教養小説の僅かな断片を除いた断片のおびただしい部分が，この小説に「たえずちりばめられる」ことになっていた「トゥイ時代のヒーマの歴史」にかかわるものであると言うことができる。そしてこの「トゥイ時代のヒーマの歴史」の断片は既に触れた『メー・ティー』やヒットラーの抬頭を扱った劇作『アルトゥロ・ルイのとどめ得る勃興』(1940) などとともにより広い領域にはいってゆくので，紙数の関係からもひとまずここで筆をおく。（5．9）

---

(59) ibid. S.594